「関係性にもとづくアイデンティティ」の構造に関する青年後期と成人期の相違

宗田直子*・岡本祐子*

An examination of the structure of identity during adolescence and adulthood, from the viewpoint of "relatedness"

Naoko Sota and Yuko Okamoto

The purpose of this study was to examine the structure of identity during adolescence and adulthood, from the viewpoint of "relatedness", using the comparative method. Items based on definition (73 items) were administered to adolescents (211 subjects) and adult (345 subjects). Factor analysis yielded seven factors in adolescents and six factors in adult, and factor "caring for a friend" was found in the former and not in the latter. The result showed that friendship was a characteristic of adolescence.

Key Word : identity, relatedness, development

Erikson（1950　仁科訳　1977）は，『幼児期と社会』において，精神分析的個体発達分化の図式 Epigenetic Scheme を提唱した。ライフサイクルにおける 8 つの心理社会的発達段階のなかで，第 5 段階，青年期における課題としてアイデンティティの危機を明確化している。アイデンティティとは，「過去において準備された斉一性と連続性とが，他者に対する自分の存在の意味—「職業」という実体的な契約に明示されているような自分の存在の意味—の斉一性と連続性に一致すると思う自信の積み重ねである（Erikson，1950　仁科訳　1977）」。Erikson は，社会的・文化的・心理的・性的といった「関係性」の中でアイデンティティが形成されることを述べている。青年期までは，重要な他者への同一化，どのような人間になりたいのか，また，なるように求められているのかといった「関係性」が重視される。そして，成人期には性器的な「関係性」，次世代を育てる慈しみ・ケア，重要な他者の「受容」といった「関係性」が，パーソナリティの成熟であり，また，アイデンティティの発揮であることが示されているといえる。

Erikson は，アイデンティティが他者との関係の中で形成されること，そして，ライフサイクルが常に他者と関わりあって発達することを重視している。しかし，アイデンティティの概念を実証しようとした Erikson 以降の研究は，他者との「関係性」の観点をしばしば見落としてきた。それは，アイデンティティ研究が，西洋的な男性優位の個人主義の中で，自律や他者からの分離を発達の最

* 広島大学大学院教育学研究科（Graduate School of Education，Hiroshima University）

優先課題としたものであり，また，男性を主たる研究対象とした男性研究者によるものであったからである（岡本，1999；杉村，1999）。近年のアイデンティティ研究では，これらに対する異論が提起され，アイデンティティ発達を，個体化の次元のみでなく，「関係性」の文脈からとらえ直そうとする試みが増加してきている（Franz & White，1985；Josselson，1992；岡本，1997；杉村，1999）。

「個」と「関係性」からみたアイデンティティ理論の具体化の必要性

アイデンティティ発達における他者との「関係性」をとらえることが提起されているが，成熟したアイデンティティのとらえ方については，研究者間で見解の相違があるように思われる。すなわち，Josselson（1992）や杉村（1999）は，「個としてのアイデンティティ」は「関係性」の中に包含され，「関係性」の中から現れるととらえており，一方，岡本（1997）は「個としてのアイデンティティ」と「関係性にもとづくアイデンティティ」のバランスと統合が，成人期のアイデンティティの成熟した様態であるというスタンスに立っている。そして，これは個体化と愛着の経路を提唱したFranz & White（1985）に近い考え方であるかもしれない（岡本，2002）。この見解の相違に関して，筆者は，「関係性」の次元の相違により，「個」と「関係性」のかかわり方がことなるのではないかと考える（宗田・岡本，2006a，2006b）。すなわち，「個」が「関係性」に包含されるあり方は，青年期のアイデンティティ形成までに特有にみられるあり方であり，アイデンティティがいったん形成される成人期以降には，「関係性」そのものの深化がみられるのではないであろうか。岡本（1997）が「関係性にもとづくアイデンティティ」の特徴とした「自分はだれのために存在するのか」という発達の方向性は，成人期以降になって，家庭建設や職業上の後進の育成など，より鮮やかに現れるものであると考えられる。一方，青年期のアイデンティティ形成までの「関係性」は，「自分はだれのために存在するのか」という発達の方向性が，青年自らのアイデンティティを保障するための意味合いを持つこともありうる。例えば，大野（1999）のいう「アイデンティティのための恋愛」のように，アイデンティティの模索段階にいる青年は恋愛関係において，恋人から賞賛を得ることで，自らの自信を得るというように，他者との関係が自らの揺らいだアイデンティティを保つために存在することもありうるのである。

このように，「関係性」にはさまざまな次元があり，「個」を確立するための「関係性」と，「個」が確立したのちに発揮される「関係性」というように，「関係性」のさまざまな次元を考慮する必要がある。そして，アイデンティティが形成される青年期までと，アイデンティティが形成された成人期以降の「関係性」を，発達段階を通して検討する必要がある。「関係性」の次元を整理することで，「個」と「関係性」からみたアイデンティティ研究における，研究者間の見解の相違が，発達段階の相違によるものであるという筆者の仮説を実証できるであろう。さらに，青年期・成人期の具体的他者との「関係性」を支える，個体内的な「関係性」をもとらえる必要がある。それというのも，発達早期の「関係性」がのちのアイデンティティ発達に及ぼす影響は，現在のアイデンティティ研究における主要テーマであるからである（岡本，2002，2007）。本研究が課題とする青年期から成人期にかけての「関係性」の発達をとらえる際に，その基盤となる発達早期の「個体内関係性」をとらえることは必須である。それでは，発達早期の「関係性」，青年期までに特有の「関係性」，成人期以降にみられる「関係性」とは，どのようなものであろうか。次に，「関係性」の次元に関す

る理論を概観する。

「関係性」の次元

幼児後期までの自我形成のための「関係性」，つまり「個体内関係性」は，自我が形成され，具体的重要な他者と社会的な関係を持つ幼児後期までに形成される「関係性」である。岡本（2007）によると，「個体内関係性」は，「誕生直後から母親をはじめ重要な他者との相互の関わりの中で形成されていく『内在化された他者像』」である。「個体内関係性」は，生涯を通じてアイデンティティの基盤となる。この「個体内関係性」を基盤としてくり広げられる，具体的な他者との「関係性」が，「社会的関係性」である。このような「関係性」の次元を考える際に，Josselson（1992）の記述が参考になるだろう。Josselson（1992，1994）は，自律性と分離した自己にかわる概念として，アイデンティティ発達の関係的側面を8次元の「関係性」として理論化した。8次元は，抱きかかえ，愛着，熱情的な体験，目と目による確認，理想化と同一化，相互性，埋め込み，慈しみ・ケアである。最初の4つの次元―抱きかかえ，愛着，熱情的な経験，目と目による確認―は，基本的なものであり，誕生後すぐに存在する。次の4つの次元は，認知的な成熟を必要とするものであり，幼児後期から現われる。同一化と埋め込みは，どのように他者に配慮して自分を位置づけるかを考える能力といった自己概念を必要とするものである。相互性と慈しみ・ケアもまた，自己中心性から脱却し，他者の世界に入っていくという発達を必要とする（Jossselson，1992）。これらの次元は，アイデンティティ形成における他者の役割を整理する際の枠組みとして重要な理論である。Josselson は最初の4次元（抱きかかえ，愛着，熱情的体験，目と目による確認）が誕生後すぐに存在すると述べており，これらを「個体内関係性」ととらえることができる。そして，「個体内関係性」の上に積み上げられる「社会的関係性」は，Josselson の理論で説明すれば，後の4次元（理想化と同一化，相互性，埋め込み，慈しみ・ケア）であるといえる。しかし，Josselson のいう慈しみ・ケアは，青年期まで―つまり，アイデンティティを獲得するまで―と成人期以降では質が異なることが推測され，両者を別個に考える必要があるのではないであろうか（宗田・岡本，2006a）。この点について，理論の精緻化と実証的研究の裏付けが求められる。

目的

上述のように，「個」と「関係性」からみたアイデンティティ生涯発達論を具体化するうえで，「関係性」の次元に焦点をあてることは，非常に重要な視点である。特に，筆者は，「個」と「関係性」理論における研究者間の見解の相違を整理するために，青年期から成人期にかけてのアイデンティティ発達をとらえることが必要であると考えている。さらに，生涯を通じて，アイデンティティの基盤となる，「個体内関係性」を注意深く検討していくことが必要である。これを検討するためのツールとして，宗田・岡本（2005a，2005b）は，心理的・個体内的次元の「関係性」と「関係性にもとづくアイデンティティ（より社会的な次元の関係性）」を測定する尺度の作成を試みた。しかし，「関係性」の次元を整理しようと試みているものの，「個体内関係性」はとらえられておらず，今後の課題である（宗田・岡本，2006b）。また，この尺度には，作成上の問題点が指摘されている（大

野，2006；高村，2006)。以上の問題点から，今後は，青年期と成人期のアイデンティティを「個」と「関係性」からとらえられる尺度の標準化を行い，青年期から成人期にかけてのアイデンティティ発達を数量的観点から検討することが課題であるといえる。そして，「個」と「関係性」からみたアイデンティティ理論を具体化してくことが求められる。

しかし，尺度作成により，青年期に特有のアイデンティティを表す尺度項目，成人期に特有のアイデンティティを表す尺度項目が，削除されることも十分ありうることを，本研究では指摘する。つまり，尺度を作成することにより，青年期と成人期のアイデンティティ得点を比較することは可能であるが，それでは各時期の特徴を見落としてしまう可能性がある。それでは，当初の目的である青年期から成人期にかけての「個」と「関係性」の発達を見落としてしまうことになり，尺度作成上の盲点であると言わねばならない。

そこで本研究では，アイデンティティの構造を青年期と成人期で比較検討することを目的とする。「関係性」の次元を表現する項目群を収集し，青年後期と成人期を対象に，質問紙調査を実施する。そして，項目分析および因子構造の検討から，青年後期と成人期の「関係性」の構造を比較検討し，青年期から成人期のアイデンティティ発達の考察を行いたい。この問題意識は，因子分析において，ある 2 群（以上）において因子構造が違う場合，構造を比較したいのか得点を比較したいのかが研究の目的により決定されるという，小塩（2006）の見解からも示されるところである。本研究では，「関係性にもとづくアイデンティティ（以下，関係性)」に焦点をあて，「関係性」の次元を因子構造の観点から明らかにしたい。特に，「関係性」を表す項目を収集する際，青年期・成人期のアイデンティティを支える「個体内関係性」をとらえることを試みる。宗田・岡本（2005a，2005b）がとりあげた「関係性」を表す項目は，「社会的関係性」のみを扱っていると考えられるため，これに加え，「個体内関係性」をも測定できる項目収集を行う必要がある。そこで，先述した Josselson（1992）と岡本（1997）の理論にもとづいて「関係性」の次元を 9 次元に設定し，項目を収集する。すなわち，「抱きかかえ」，「愛着」，「熱情的体験」，「目と目による確認」，「理想化と同一化」，「相互性」，「埋め込み」，「慈しみ・ケア」である。このうち「慈しみ・ケア」は，青年期に特有の「慈しみ・ケア」と，成人期以降の世代性の質を含む「慈しみ・ケア」というように，2 次元的にとらえる。

さて，青年期と成人期のあいだをどう区別するかに関して，本研究では，10 代は青年期，30 代以降は成人期ととらえたい。20 代に関しては，次のように考える。アイデンティティ達成のひとつの契機として，職業に就くことが挙げられる。そこで，大学生と職業が定職でない方は青年期ととらえ，就職している方（アルバイトを除く）を成人期ととらえる。また，成人期の課題の親密性達成のひとつのあらわれとして結婚が挙げられると考え，20 代の既婚の方を成人期ととらえる。

方法

1. 項目収集

「関係性」の次元を 9 次元に設定し，次元ごとに項目を収集した。Josselson（1992，1994）の記述から項目を作成したほか，EPSI（中西・佐方，1993）から 4 項目（うち 1 項目は表現を修正)，長沼・

落合（1998）から2項目（表現を修正），高井（1999）から1項目，宗田・岡本（2005b）から12項目（うち4項目は表現を修正）を引用した。宗田・岡本（2005b）のうち，3項目は高井（1999）から引用した項目，1項目は杉村（2001）から作成した項目である。また，筆者が岡本（1997，2002）の理論をもとに項目を作成した。「抱きかかえ」8項目，「愛着」8項目，「熱情的体験」8項目，「目と目による確認」7項目，「理想化と同一化」7項目，「相互性」10項目，「埋め込み」7項目，「青年期に特有の慈しみ・ケア」8項目，「成人期以降の慈しみ・ケア」10項目，計73項目であった。

2．調査票

「関係性にもとづくアイデンティティ」項目群，73項目。回答は，7件法で求めた。それぞれの内容が自分にあてはまると思われる箇所［1．全くあてはまらない，2．ほとんどあてはまらない，3．どちらかというとあてはまらない，4．どちらともいえない，5．どちらかというとあてはまる，6．かなりあてはまる，7．非常にあてはまる］のいずれか1つに○印をつけるように求めた。フェイス項目（性別，年齢，未婚・既婚，子どもの有無，職業）は，いずれかに○をつけるか記述するように求めた。

3．調査手続き

大学生を対象とした調査では，異なる都道府県の国立A，私立B大学において講義中に配布し，集団的に実施した。一部の青年は直接依頼し，郵送により回収した。成人期の調査では，知人を通じて全国的に配布もしくは郵送で依頼し，郵送により回収した。また，カウンセリング・スクールに依頼し，受講者に回答を求め，後日回収した。郵送法の場合には依頼状を添付した。

4．調査対象者

558名（男性221名，女性337名），平均年齢（*SD*）は37.92歳（*SD*=17.05歳），男性36.82歳（*SD*=18.06歳），女性38.65歳（*SD*=16.34歳）であった。調査対象者の年代ごとの人数は表1に示した。このうち，目的で述べた操作的定義をもとに分類した結果，青年後期は211名（男性102名，女性109名），平均年齢（*SD*）は20.36歳（*SD*=1.57歳），男性20.28歳（*SD*=1.49歳），女性20.44歳（*SD*=1.64歳）であった。成人期は345名（男性119名，女性226名），平均年齢（*SD*）は48.75歳（*SD*=12.70歳），男性50.99歳（*SD*=12.93歳），女性47.57歳（*SD*=12.44歳）であった。2名は不明であった。

5．調査時期

2006年1月から9月であった。

表1　調査対象者の年代ごとの人数

年代	年齢範囲（歳）	人数
10代	18-19	62
20代	20-29	184
30代	30-39	49
40代	40-49	81
50代	50-59	116
60代	60-69	54
70代以上	70-82	12
全体	18-82	558

結果

1．結果の整理方法

青年後期と成人期のデータを分けて分析した。まず，青年後期のデータに関して，項目分析を行い，不適切な項目を除外した。項目除外後，因子分析を行い，因子構造を検討した。次に，成人期のデータに関して，項目分析を行い，不適切な項目を除外し

た。項目除外後，因子分析を行い，因子構造を検討した。

なお，項目を記述する際，項目末に「関係性」の次元を記載した。各次元は次のとおりに簡略化した。「抱きかかえ」はH，「愛着」はA，「熱情的体験」はP，「目と目の確認」はV，「理想化と同一化」はI，「相互性」はM，「埋め込み」はE，「青年期に特有の慈しみ・ケア」はCF，「成人期以降の慈しみ・ケア」はCSとした。

2. 青年後期の「関係性にもとづくアイデンティティ」の構造

2-1. 項目分析

各項目の評定をそれぞれ1〜7点と得点化した。まず，青年後期を対象とした，「関係性」項目群の項目分析を行った。度数分布表とヒストグラムから，すべての項目の変数分布は単峰形であることを確認した。尖度の算出を行ったところ，すべての項目についてほぼ許容範囲であった。また，歪度についても，ほぼ許容範囲であった。しかし，評定の範囲の幅の狭い項目が3項目（R8，11，72）見られた。天井効果の検討を行ったところ，効果は認められなかった。フロア効果の検討を行ったところ，3項目（R5，9，30）において効果がみられた。したがってこれらの6項目は，以降の分析では削除して行う。削除された項目は，表2-1に示した。

2-2. 因子分析

青年後期の「関係性」の構造を検討するために，項目分析で不適切と判断した6項目を削除した67項目について，主因子法による因子分析を行った。初期の固有値の減衰状況と解釈可能性から7因子解を選択し，*Promax* 回転による因子分析を行った（表2-2）。因子負荷量が.40の値をとるもの以上をマークした（2つの因子に.40以上負荷する項目は除く）。第1因子（以下，因子をFと略す）は，「私には，理想とする人やヒーローがいる」，「情緒的に満たされる関係を，私はもっている」といった項目からなり，「熱情的体験をともなう同一化」と命名した。F2は，「他者に対する恋のような熱情が，私の新しい世界と経験をつくっていると思う」，「人から見られることで，私は，自分がどのようなものであるのかを確認できる」といった項目からなり，「熱情をともなう目と目の確

表2-1　「関係性」項目群の項目分析で除外された項目（青年後期）（N=211）

項目	最小値	最大値	平均値	*SD*	歪度	尖度
R5　私は，一人ぼっちである。A	1	7	2.45	1.48	0.92	0.10
R8　異なる意見を持つ人と議論をする中で，自分の考えを見直すことがある。M	2	7	5.34	1.00	-0.74	1.61
R9　私は子育てにあまり関心を持っていない。CS	1	7	2.54	1.60	1.12	0.76
R11　友人が困っていたら，いつも親身になって解決策を考える。CF	2	7	5.18	1.04	-0.21	0.41
R30　私は，誰かと「恋」をしているという体験をもたない。P	1	7	2.15	1.61	1.32	0.79
R72　私は人生の重要な選択を決定するときに，ほとんど周りの人の意見を参考にしない。I	1	6	2.71	1.23	0.61	-0.10

（項目の前に付した番号は，調査票に記載した順番である）

表 2-2　青年後期の「関係性にもとづくアイデンティティ」項目群の因子分析結果（主因子法・*Promax* 回転）（*N*=211）

	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7	h^2
F1 熱情的体験をともなう同一化								
R52 私には，理想とする人やヒーローがいる。I	.93	-.16	.14	-.15	-.04	-.06	-.11	.47
R53 私は，今そこにいる「その人」に対して，愛着を感じている。A	.73	.02	.05	-.16	.11	-.03	.09	.53
R16 自分の生き方を決めるきっかけとなった人がいる。I	.71	-.08	-.13	-.08	.07	-.08	-.11	.36
R41 情緒的に満たされる関係を，私はもっている。P	.64	.01	-.11	-.16	.12	-.01	.02	.41
R34 私は，誰かと互いに情緒的な結びつきを感じている。P	.57	.01	.13	-.13	.08	.21	.15	.51
R55 私は，自分がどのようになるかについて，モデルとする人がいる。I	.49	.11	-.04	-.08	.07	-.11	-.04	.23
R38「ここが私の所属する場所だ」と，日常生活の中で日々感じている所がある。E	.46	-.07	.16	-.02	.14	-.01	.45	.58
R46 誰かとの間で情緒的な体験をすることにより，私は自分の新しい思考や目的に気づいていると思う。P	.45	.21	.00	.00	-.06	-.03	-.03	.31
R47 肉体的にも，精神的にも，私は誰かに抱きかかえられることを望んでいる。H	.45	.17	-.04	.16	-.18	.05	-.30	.31
R69 私は人とつきあう中で自分を見つめ直すことができると思う。M	.42	.21	-.28	.06	.02	-.06	-.02	.43
R65 私は自分と合わない相手でも，その人のすぐれている点は認めることができる。M	.40	-.08	-.27	-.03	.06	.00	.04	.28
R32 私は，未来を担う子どもたちを育てていきたいと思う。CS	.38	-.24	-.08	.11	.13	.29	.04	.43
R49 人と付き合っていると，今まで知らなかった自分に気づくことがある。M	.37	.11	-.02	.06	-.03	.15	-.02	.30
R14「誰か」に対して，情緒的な感情を持つことなどない。P	-.35	-.06	.26	.04	.02	-.21	-.05	.42
R51 私が存在している場所は，私にとっての大事な他者の存在する場所でもある。E	.33	.12	-.06	.13	.04	.13	.15	.51
R35 友人の悩み事や相談事をきくことは，私の大事な使命だと思う。CF	.29	.26	-.12	.02	-.15	.00	.26	.49
F2 熱情をともなう目と目の確認								
R59 私は，他者の目の中に自分自身を映し出す。V	-.08	.77	-.13	-.03	-.03	-.08	-.19	.40
R67 私は他者の目の中に，自分自身の価値を見出すことができる。V	-.03	.69	.05	.00	.08	-.06	.05	.48
R6 目と目のコンタクトを通して，私は他者に対する自分の意味を見つけることができる。V	-.12	.68	-.13	-.15	.04	-.08	.14	.39
R48 人から見られることで，私は，自分がどのようなものであるのかを確認できる。V	.34	.58	.00	-.10	.12	.03	-.32	.46
R18 目と目のコンタクトを通して，私は自分自身について信じられるようになれる。V	-.01	.53	.12	-.02	.15	-.10	.24	.43
R44 他者に対する恋のような熱情が，私の新しい世界と経験をつくっていると思う。P	.29	.47	.15	-.08	-.03	.17	.03	.53
R29 私は，他者にとって重要な存在であることが，他者の目を見ることによってわかる。V	.12	.46	.27	-.14	.16	.04	.08	.37
R56 私は，世界から十分に守られているという感じがする。H	.00	.45	.04	.17	.44	-.15	-.15	.41
R57 私は，他者との結びつきを通して快感を得ている。P	.04	.39	-.13	.21	.06	-.06	.24	.53
R31 私は，どこかに所属することを強く望んでいる。E	-.16	.37	-.09	.24	-.08	.18	-.01	.28
F3 相互調整・相互性								
R45 誰かと意見が食い違うと，それ以上は話す気になれない。M	.01	.04	.79	-.04	-.02	-.01	.02	.63
R40 自分と違う意見をもつ人の話は，聞きたくない。M	-.08	.12	.77	.10	-.03	.04	-.12	.67
R37 自分と異なる意見を持つ人とは，あまり話をしたくない。M	-.04	-.05	.75	.05	-.09	.00	-.03	.61
R58 相手と意見が合わなくても，わざわざ話し合って解決しようとは思わない。M	.00	-.07	.62	-.04	-.03	-.09	.04	.45
R71 私は自分と異なる意見にも積極的に耳を傾けようとする。M	.34	.02	-.49	.07	.00	-.16	.09	.45
R62 親や教師，友人といった周りの人は，私が人生の重大な決定をする上で，あまり意味を持っていない。I	.09	.00	.41	-.20	-.14	-.19	.03	.34
R33 友人の相談にのることが面倒だと思うことがある。CF	.24	-.22	.40	.21	.06	-.19	-.18	.30

F4 「親」への愛着(行動)								
R22「親」のところへ戻るとほっとする。A	-.32	-.09	-.02	1.00	.12	.01	-.08	.68
R13「親」に愛されたいと心から思う。A	.10	-.21	-.02	.86	.05	-.05	.00	.70
R7 私は,「親」への温かい感覚をずっともっている。A	-.15	-.03	-.01	.79	.21	.05	-.03	.59
R60 私は,できれば「親」に側にいてもらいたい。A	-.14	.06	.18	.68	-.04	-.08	.01	.38
R43 大事な選択をする際は,親や友人の意見を聞く。I	.07	.05	-.07	.48	-.13	.04	.07	.38
R15 家族への気遣いや配慮に献身することが私の生きがいである。CS	-.06	.16	.00	.45	.19	.13	-.04	.37
R10 自分の生き方を決めていく中で,親や先生,先輩などの話は大変意義深いと思う。I	.00	-.09	-.18	.33	.02	.10	.08	.24
R66 私は他者との激しい結びつきを求めている。P	.22	.28	.08	.31	-.24	-.04	.13	.55
F5 他者(世界)に対する安心感・信頼感								
R21 私は,十分に世界が安全だと感じている。H	-.01	.32	-.11	-.08	.54	-.21	-.08	.35
R24 世界は,私をつき落とすようなことはないだろうと思う。H	.04	.02	.16	.10	.53	-.04	.15	.38
R42 底のない,恐怖だらけの場所へ落ちていくのではないかと怖れている。H	-.07	.02	.23	-.09	-.51	-.04	.14	.38
R54 私は,親であること(親になること)が不安である。CS	.09	-.14	.08	.18	-.50	-.41	.30	.42
R27 他者の冷たい目を見て,誰も私を必要としていないと思う。V	-.28	.26	.23	.01	-.45	-.11	-.04	.47
R17 世界は,自分を愛し,自分に応答し,自分を含んでくれると思う。H	.23	.16	.02	.16	.43	-.25	.15	.48
R70 私は周りの世界を,頼ることができないと体感している。H	-.02	.13	.01	-.10	-.41	-.13	-.11	.27
R26 私は,社会的な存在として,世界の中に所属していると思う。E	.13	.07	-.04	.09	.34	.00	.15	.32
R1 私は相手の良いところも悪いところも,ありのままに受け入れられる。M	.00	.17	-.15	.04	.28	-.09	.16	.21
F6 配偶者・子ども・家庭への配慮								
R23 結婚して配偶者や子どもの世話をするよりも,自分のことだけを考えて生きていきたいという気持ちの方が強い。CS	-.02	.11	.11	.05	-.06	-.85	.09	.69
R39 子育てに追われるより,自分のやりたいことや趣味を優先させていきたいと思う。CS	.24	.11	.13	-.02	-.10	-.70	-.13	.57
R73 職業・キャリアよりも,あたたかい家庭を築きたいと思う。CS	.04	-.08	-.08	.00	-.15	.68	-.03	.46
R50 よき配偶者を得て結婚することが,私の最大の関心ごとである(あった)。CS	.13	.25	.22	.09	-.11	.56	-.08	.54
R2 私は,よい親である(親になる)自信がある。CS	-.04	.17	.11	.04	.36	.51	.00	.51
R36 結婚し,家庭を築くことは,私にとって大きな課題だ(だった)。CS	.27	-.01	.02	.27	-.15	.39	-.09	.44
R63 私はいつも,私にとって大事な人のそばにいたいと思う。A	.20	.21	.09	.10	-.12	.30	.16	.51
F7 所属感と友人への思いやり								
R25 友人が何かをやりたがっていたら,それができるようにいつも協力している。CF	.04	-.05	-.09	.06	-.10	-.22	.69	.44
R20 私は,自分が所属している文化に,とても馴染んでいる気がする。E	-.07	.12	.01	-.05	.26	.01	.55	.41
R61 私は,周りの人に対して違和感はなく,調和していると思う。E	-.15	-.02	.11	.04	.38	-.03	.54	.37
R12 私は,ある特定の集団の中に,自分の存在する場所をみつけた。E	.22	-.07	.13	.00	.14	.07	.53	.48
R28 友人の希望よりも,自分の希望の方を優先させている。CF	.36	-.01	.18	.26	.00	-.13	-.51	.29
R19 友人が何かに困っていても,自分から進んで手伝おうとは思わない。CF	.09	-.05	.20	.20	.04	-.23	-.51	.42
R4 自分の周りには,自分を支えてくれる腕があるという感じがする。H	.16	-.13	.02	.17	.18	-.06	.47	.43
R64 私はいつも友人のことを思いやっていたい。CF	.09	.12	-.24	.08	-.15	.03	.46	.57
R68 私はちょっとしたことでも,友人に世話をしてあげることが楽しい。CF	-.07	.31	-.17	.08	-.11	.09	.41	.52
R3「人とのつながりがない」と感じることがある。A	-.02	.20	-.02	-.01	-.33	-.05	-.37	.27
累積寄与率	22.33	28.91	32.92	36.32	39.21	41.70	43.85	
因子相関行列 F1	-	.57	-.21	.60	.23	.45	.60	
F2		-	.00	.45	.07	.36	.47	
F3			-	-.18	-.12	-.37	-.34	
F4				-	.17	.40	.51	
F5					-	.17	.17	
F6						-	.48	
F7							-	

(項目の前に付した番号は,調査票に記載した順番である)

認」と命名した。F3 は，「誰かと意見が食い違うと，それ以上は話す気になれない」，「私は自分と異なる意見にも積極的に耳を傾けようとする」といった項目からなった。因子負荷量が正のものを逆転項目ととらえ，「相互調整・相互性」と命名した。F4 は，「『親』のところへ戻るとほっとする」，「『親』に愛されたいと心から思う」といった項目からなり，「『親』への愛着（行動）」と命名した。F5 は，「私は，十分に世界が安全だと感じている」，「底のない，恐怖だらけの場所へ落ちていくのではないかと怖れている（逆転項目）」といった項目からなり，「他者（世界）に対する安心感・信頼感」と命名した。F6 は，「結婚して配偶者や子どもの世話をするよりも，自分のことだけを考えて生きていきたいという気持ちの方が強い（逆転項目）」，「よき配偶者を得て結婚することが，私の最大の関心ごとである（あった）」といった項目からなり，「配偶者・子ども・家庭への配慮」と命名した。F7 は，「友人が何かをやりたがっていたら，それができるようにいつも協力している」，「私は，周りの人に対して違和感はなく，調和していると思う」といった項目からなり，「所属感と友人への思いやり」と命名した。

3. 成人期の「関係性にもとづくアイデンティティ」の構造

3-1. 項目分析

各項目の評定をそれぞれ 1〜7 点と得点化した。成人期を対象とした，「関係性」項目の分析を行った。すべての項目の変数分布は単峰形であることを確認した。尖度と歪度を算出したところ，許容範囲と思われた。しかし，評定の幅の狭い項目が 6 項目（R8，11，19，33，63，64）みられた。天井効果を検討したところ，効果は見られなかった。フロア効果を検討したところ，3 項目（R5，9，30）において効果が見られた。したがって，以降の分析ではこれらの 9 項目を削除して行う。削除された項目は，表 3-1 に示した。

表 3-1　「関係性」項目群の項目分析で除外された項目（成人期）(N=345)

項目	最小値	最大値	平均値	SD	歪度	尖度
R5　私は，一人ぼっちである。A	1	7	2.32	1.43	0.99	0.25
R8　異なる意見を持つ人と議論をする中で，自分の考えを見直すことがある。M	2	7	5.19	0.86	-0.38	1.08
R9　私は子育てにあまり関心を持っていない。CS	1	7	2.36	1.38	1.07	0.87
R11　友人が困っていたら，いつも親身になって解決策を考える。CF	2	7	5.32	0.94	-0.21	0.27
R19　友人が何かに困っていても，自分から進んで手伝おうとは思わない。CF	1	6	2.57	1.00	0.42	0.29
R30　私は，誰かと「恋」をしているという体験をもたない。P	1	7	2.34	1.42	1.01	0.50
R33　友人の相談にのることが面倒だと思うことがある。CF	1	6	3.03	1.28	0.27	-0.62
R63　私はいつも，私にとって大事な人のそばにいたいと思う。A	2	7	5.05	1.21	-0.18	-0.29
R64　私はいつも友人のことを思いやっていたい。CF	2	7	4.79	1.13	-0.08	-0.09

（項目の前に付した番号は，調査票に記載した順番である）

3-2. 因子分析

成人期の「関係性」の構造を検討するために，9 項目を削除した 64 項目について，主因子法による因子分析を行った。初期の固有値の減衰状況と解釈可能性から 6 因子解を選択し，*Promax* 回転を行った（表 3-2）。因子負荷量.40 以上をマークした（2 つの因子に.40 以上負荷する項目は除く）。F1

表 3-2 成人期の「関係性にもとづくアイデンティティ」項目群の因子分析結果（主因子法・*Promax* 回転）（*N*=345）

	F1	F2	F3	F4	F5	F6	h^2
F1 熱情をともなう目と目の確認							
R67 私は他者の目の中に，自分自身の価値を見出すことができる。V	.71	.11	-.04	.00	.01	-.01	.53
R18 目と目のコンタクトを通して，私は自分自身について信じられるようになれる。V	.63	.29	.01	.04	-.01	-.08	.53
R47 肉体的にも，精神的にも，私は誰かに抱きかかえられることを望んでいる。H	.57	-.41	-.03	-.13	.10	.12	.44
R6 目と目のコンタクトを通して，私は他者に対する自分の意味を見つけることができる。V	.57	.19	-.15	-.02	-.04	.04	.34
R48 人から見られることで，私は，自分がどのようなものであるのかを確認できる。V	.53	-.12	.12	.07	.09	.11	.40
R59 私は，他者の目の中に自分自身を映し出す。V	.52	-.03	.18	.14	.02	.09	.42
R46 誰かとの間で情緒的な構築をすることにより，私は自分の新しい思考や目的に気づいていると思う。P	.51	-.05	.15	-.14	.00	-.17	.34
R66 私は他者との激しい結びつきを求めている。P	.51	-.30	.19	-.07	.09	-.01	.42
R29 私は，他者にとって重要な存在であることが，他者の目を見ることによってわかる。V	.51	.17	.04	-.03	-.10	.12	.38
R57 私は，他者との結びつきを通して快感を得ている。P	.49	.09	.35	-.08	-.02	-.03	.56
R44 他者に対する恋のような熱情が，私の新しい世界と繋がりをつくっていると思う。P	.48	-.16	.25	-.07	.00	-.15	.37
R17 世界は，自分を愛し，自分に応答し，自分を含んでくれると思う。H	.44	.42	.09	-.03	.04	-.15	.49
R69 私は人とつきあう中で自分を見つめ直すことができると思う。M	.40	.09	-.02	-.24	.05	.10	.30
R49 人と付き合っていると，今まで知らなかった自分に気づくことがある。M	.33	-.17	.11	-.10	.05	.11	.20
R21 私は，十分に世界が安全だと感じている。H	.31	.28	-.19	.00	-.01	-.27	.20
R68 私はちょっとしたことでも，友人に世話をしてあげることが楽しい。CF	.26	.02	.26	-.07	.11	.03	.29
F2 他者（世界）に対する安心感・信頼感							
R27 他者の冷たい目を見て，誰も私を必要としていないと思う。V	.26	-.64	-.08	.18	-.01	.07	.52
R24 世界は，私をつき落とすようなことはないだろうと思う。H	.05	.57	-.06	.09	.15	-.08	.30
R54 私は，親であること（親になること）が不安である。CS	.23	-.57	.02	-.03	.11	-.25	.42
R61 私は，周りの人に対して違和感はなく，調和していると思う。E	.01	.55	-.04	-.03	.28	.05	.40
R2 私は，よい親である（親になる）自信がある。CS	.07	.55	-.03	.08	.06	.17	.37
R26 私は，社会的な存在として，世界の中に所属していると思う。E	.23	.55	.11	.04	-.05	-.06	.43
R42 底のない，恐怖だらけの場所へ落ちていくのではないかと怖れている。H	.36	-.52	-.08	.20	-.03	.02	.44
R56 私は，世界から十分に守られているという感じがする。H	.36	.51	.03	-.04	.07	-.16	.48
R20 私は，自分が所属している文化に，とても馴染んでいる気がする。E	.13	.47	.15	-.01	.14	.03	.41
R38「ここが私の所属する場所だ」と，日常生活の中で日々感じている所がある。E	.03	.39	.37	.25	-.17	.07	.34
R1 私は相手の良いところも悪いところも，ありのままに受け入れられる。M	.33	.35	-.30	-.28	.06	.09	.33
R3「人とのつながりがない」と感じることがある。A	.16	-.31	-.24	.23	-.19	.20	.36
R70 私は周りの世界を，頼ることができないと体感している。H	.14	-.29	-.14	.23	-.18	.00	.29
F3 熱情的体験をともなう同一化							
R16 自分の生き方を決めるきっかけとなった人がいる。I	-.06	.03	.72	.18	-.15	.03	.40
R55 私は，自分がどのようになるかについて，モデルとする人がいる。I	.05	-.07	.65	.19	.07	-.12	.38

R34 私は，誰かと互いに情緒的な結びつきを感じている。P	.16	.02	.56	-.07	-.12	-.08	.38
R52 私には，理想とする人やヒーローがいる。I	.08	.02	.52	.10	.03	.00	.30
R12 私は，ある特定の集団の中に，自分の存在する場所をみつけた。E	.07	.11	.51	.10	-.06	.00	.29
R62 親や教師，友人といった周りの人は，私が人生の重大な決定をする上で，あまり意味を持っていない。I	.06	-.02	-.50	.11	-.33	.00	.54
R35 友人の悩み事や相談事をきくことは，私の大事な使命だと思う。CF	.26	.03	.43	-.07	-.03	.03	.39
R41 情緒的に満たされる関係を，私はもっている。P	.08	.32	.41	-.07	-.14	.07	.43
R14「誰か」に対して，情緒的な感情を持つことなどない。P	-.06	.02	-.38	.17	-.05	.04	.26
R4 自分の周りには，自分を支えてくれる腕があるという感じがする。H	.06	.19	.36	-.16	.17	-.09	.39
R53 私は，今そこにいる「その人」に対して，愛着を感じている。A	.12	.01	.36	-.06	-.05	.19	.28
R31 私は，どこかに所属することを強く望んでいる。E	.23	-.02	.33	.24	.01	.10	.27
R25 友人が何かをやりたがっていたら，それができるようにいつも協力している。CF	.10	.08	.30	-.08	.02	.02	.19
R10 自分の生き方を決めていく中で，親や先生，先輩などの話は大変意義深いと思う。I	-.06	-.09	.27	-.12	.26	.17	.30
F4 相互調整・相互性							
R37 自分と異なる意見を持つ人とは，あまり話をしたくない。M	-.07	.00	.12	.86	.14	.01	.64
R45 誰かと意見が食い違うと，それ以上は話す気になれない。M	-.04	.07	.07	.81	.17	.03	.55
R40 自分と違う意見をもつ人の話は，聞きたくない。M	.02	-.10	.07	.81	.10	.00	.64
R71 私は自分と異なる意見にも積極的に耳を傾けようとする。M	.18	.12	-.11	-.56	.00	.12	.40
R58 相手と意見が合わなくても，わざわざ話し合って解決しようとは思わない。M	-.14	.21	-.15	.51	-.07	.11	.36
R65 私は自分と合わない相手でも，その人のすぐれている点は認めることができる。M	.10	.23	-.22	-.43	-.04	.20	.31
R28 友人の希望よりも，自分の希望の方を優先させている。CF	-.02	.17	-.12	.26	.21	-.18	.12
F5「親」への愛着（行動）							
R22「親」のところへ戻るとほっとする。A	.02	.17	-.13	.18	.83	-.03	.57
R7 私は，「親」への温かい感覚をずっともっている。A	-.04	.32	-.10	.07	.59	.05	.37
R60 私は，できれば「親」に側にいてもらいたい。A	.22	.02	-.19	.25	.58	.06	.35
R43 大事な選択をする際は，親や友人の意見を聞く。I	.00	-.08	.16	.00	.52	.15	.43
R13「親」に愛されたいと心から思う。A	.13	.02	.12	.08	.41	.12	.30
R72 私は人生の重要な選択を決定するときに，ほとんど周りの人の意見を参考にしない。I	.08	.08	-.27	.15	-.36	-.15	.41
R32 私は，未来を担う子どもたちを育てていきたいと思う。CS	.09	.24	.27	-.07	-.30	.24	.35
F6 配偶者・子ども・家庭への配慮							
R23 結婚して配偶者や子どもの世話をするよりも，自分のことだけを考えて生きていきたいという気持ちの方が強い。CS	.22	-.03	-.05	.18	-.11	-.61	.50
R50 よき配偶者を得て結婚することが，私の最大の関心ごとである（あった）。CS	.24	.07	-.13	.15	.06	.59	.44
R39 子育てに追われるより，自分のやりたいことや趣味を優先させていきたいと思う。CS	.19	-.08	.11	.21	-.09	-.59	.43
R36 結婚し，家庭を築くことは，私にとって大きな課題だ（だった）。CS	.19	.03	.07	.08	-.12	.55	.41
R73 職業・キャリアよりも，あたたかい家庭を築きたいと思う。CS	.05	-.20	-.09	-.03	.19	.49	.29
R15 家族への気遣いや配慮に献身することが私の生きがいである。CS	-.01	.18	.15	.21	.13	.48	.40
R51 私が存在している場所は，私にとっての大事な他者の存在する場所でもある。CS	.22	.19	.10	-.05	-.01	.35	.37

累積寄与率		18.13	25.09	29.80	33.55	36.29	38.64
因子相関行列	F1	-	.21	.47	-.02	.19	.21
	F2		-	.29	-.31	-.01	.22
	F3			-	-.37	.42	.37
	F4				-	-.30	-.15
	F5					-	.20
	F6						-

（項目の前に付した番号は，調査票に記載した順番である）

は,「目と目のコンタクトを通して,私は自分自身について信じられるようになれる」,「肉体的にも,精神的にも,私は誰かに抱きかかえられることを望んでいる」といった項目からなり,「熱情をともなう目と目の確認」と命名した。F2は,「世界は,私をつき落とすようなことはないだろうと思う」,「私は,周りの人に対して違和感はなく,調和していると思う」といった項目からなり,「他者(世界)に対する安心感・信頼感」と命名した。F3は,「自分の生き方を決めるきっかけとなった人がいる」,「私は,誰かと互いに情熱的な結びつきを感じている」といった項目からなり,「熱情的体験をともなう同一化」と命名した。F4は,「自分と異なる意見を持つ人とは,あまり話をしたくない(逆転項目)」,「私は自分と合わない相手でも,その人のすぐれている点は認めることができる」といった項目からなった。因子負荷量が正のものを逆転項目ととらえ,「相互調整・相互性」と命名した。F5は,「『親』のところへ戻るとほっとする」,「私は,『親』への温かい感覚をずっともっている」といった項目からなり,「『親』への愛着(行動)」と命名した。F6は,「結婚し,家庭を築くことは,私にとって大きな課題だ(だった)」,「家族への気遣いや配慮に献身することが私の生きがいである」といった項目からなり,「配偶者・子ども・家庭への配慮」と命名した。

考察

1. 青年後期と成人期の「関係性にもとづくアイデンティティ」の構造の相違(1)項目分析より

青年後期と成人期の記述統計量において,フロア効果の結果が共通していたことは,この内容がどの時期においても不適切であるということを意味している。内容をみてみると,「R5 私は,一人ぼっちである」,「R9 私は子育てにあまり関心を持っていない」,「R30 私は,誰かと「恋」をしているという体験をもたない」である。

青年後期と成人期の項目評定の幅については相違が見られた。本研究の対象者においては,青年後期では「R72 私は人生の重要な選択を決定するときに,ほとんど周りの人の意見を参考にしない」が不適切であると判断された。成人期では,「R19 友人が何かに困っていても,自分から進んで手伝おうとは思わない」,「R33 友人の相談にのることが面倒だと思うことがある」,R 63「私はいつも,私にとって大事な人のそばにいたいと思う」,「R64 私はいつも友人のことを思いやっていたい」が不適切な項目であると判断された。この結果から,青年後期においては,友人への面倒をみるといったことが成人期に比べて自分に全くあてはまらないと考えていることが推察できる。また,成人期においては,人生における重要な選択は,確立したアイデンティティをもって行うため,他者に意見を聞くことが青年後期ほど重要ではないことが考察できる。

2. 青年後期と成人期の「関係性にもとづくアイデンティティ」の構造の相違(2)因子分析より

因子分析の結果,青年期においては「友人への思いやり」因子が抽出されたが,成人後期においては抽出されなかった。これは,項目分析において,成人期の「関係性」項目群から友人への思いやりを表す項目が多数除外されたことにもよると考えられる。表 3-1 をみると,友人への思いやりを示す項目に対して,「全くあてはまらない」と評定した者が皆無である。このことは,成人期の方は,

友人に全く世話をしないということはないことを示している。

因子分析において，成人期の「友人への思いやり」が抽出されなかったことは，成人期において，友人関係が表面にでないことをも示唆している。成人期においては，配偶者や子ども，年老いた親といった重要な他者との関係が，より表面に現れるのかもしれない。しかし，成人期においても，意識にのぼらない友人関係は存在すると思われる。それというのも，「個体内関係性」が一生を通じてアイデンティティを支えるように，過去に形成された他者イメージや，幼児後期以降に形成された具体的な他者との「社会的関係性」の体験は，一生を通じて，アイデンティティを底支えすると思われるからである。実際の友人関係が生活の中で展開されなくとも，過去の友人関係が成人期の他者イメージを支えていることは十分認められるであろう。

以上のように，成人期の「関係性」の構造に「友人への思いやり」が反映されないことは，重要な知見である。成人期においては，アイデンティティ発達における友人との関係が，青年期よりも重要ではないという仮説も立てられる。成人期のアイデンティティ再体制化にかかわる他者として，実際の友人関係がどのようにかかわっているのかに関して，また，過去の友人関係による体験がどのようにアイデンティティを支えているのかに関して，今後，質的手法を用いて詳細に検討していく必要がある。

青年期においては，「友人への思いやり」が特徴として現れた。友人関係や友人への思いやりが，どのように青年のアイデンティティ体験となっているかに関して，今後，質的手法を用いて詳細に検討していくことが期待される。

また，本研究の結果，青年後期と成人期ともに，「熱情をともなう目と目の確認」因子，「『親』への愛着（行動）」因子，「世界（他者）に対する安心感・信頼感」因子が抽出された。これらは，項目収集の際に，「個体内関係性」として選択した項目から主に構成された因子である。しかし，「社会的関係性」として選択した項目も混じっており，本研究において Josselson 理論にもとづく「関係性」の次元が明確に抽出されたとはいい難い。この結果は，「個体内関係性」を表現する項目収集の問題点を有しており，今後，さらに項目を洗練していく必要がある。また，因子として抽出されたものが「個体内関係性」であるといえるかに関しては，今後，構成概念妥当性の観点からの検討が必要であろう。しかし，宗田・岡本（2005b）が尺度作成の試みにおいてとらえることができなかった因子が抽出されたことは，注目すべき知見であり，「関係性」理論の精緻化に貢献すると考えられる。

本研究においては，「関係性」の構造を青年後期と成人期において比較した。今後は，青年期から成人期にかけての「関係性」の発達をとらえるために，青年後期と成人期に共通して用いられる「関係性」尺度を作成することが課題である。そして，尺度を用いて，「個」と「関係性」の関連が，青年期と成人期においてどのように異なるかを実証し，「個」と「関係性」からみたアイデンティティ理論を精緻化していくことが課題である。

引用文献

Erikson, E. H. (1950). *Childhood and Society*. New York : Norton.
(エリクソン, E. H. 仁科弥生 (訳) (1977). 幼児期と社会　みすず書房)

Franz, C.E. & White, K.M. (1985). Individuation and attachment in personality development: Extending Erikson's theory. *Journal of Personality*, **53**, 224- 256.

Josselson, R. (1992). *The space between us: Exploring the dimensions of human relationships*. San Francisco: Jossey-bass.

Josselson, R. (1994). Identity and relatedness in life cycle. In H. A. Bosma (Ed.), *Identity and development : An Interdisciplinary approach*. Thousand Oaks: Sage, pp.81-102.

中西信男・佐方哲彦 (1993). EPSI エリクソン心理社会的段階目録検査　上里一郎 (監修)　心理アセスメントハンドブック　西村書店　pp.419-431.

長沼恭子・落合良行 (1998). 同性の友達とのつきあい方からみた青年期の友人関係　青年心理学研究, **10**, 35-47.

岡本祐子 (1997). 中年からのアイデンティティ発達の心理学　ナカニシヤ出版

岡本祐子 (1999). 女性の生涯発達とアイデンティティ—背景と問題のありか　岡本祐子 (編著) 女性の生涯発達とアイデンティティ　北大路書房　pp. i -vii.

岡本祐子 (編著) (2002). アイデンティティ生涯発達論の射程　ミネルヴァ書房

岡本祐子 (2007). アイデンティティ生涯発達論の展開—中年期の危機と心の深化—　ミネルヴァ書房

大野　久 (1999). 人を恋するということ　佐藤有耕 (編著) 高校生の心理　広がる世界　大日本図書　pp.70-95.

大野　久 (2006). アイデンティティ概念再考：個と関係性の観点から—宗田・岡本論文へのコメント　青年心理学研究, **18**, 97-102.

小塩真司(2006). SPSSによる調査データ解析の要点と盲点　青年心理学会第14回大会発表論文集, 22-23.

宗田直子・岡本祐子 (2005a). アイデンティティの成熟をとらえる際の「個」と「関係性」の概念についての一考察　日本青年心理学会第13回大会発表論文集, 42-45.

宗田直子・岡本祐子 (2005b). アイデンティティの発達をとらえる際の「個」と「関係性」の概念の検討—「個」尺度と「関係性」尺度作成の試み　青年心理学研究, **17**, 27-42.

宗田直子・岡本祐子 (2006a). 「個」と「関係性」からアイデンティティをとらえる試み再々考—大野・高村コメントへのリプライ　青年心理学研究, **18**, 103-108.

宗田直子・岡本祐子 (2006b). 「個」と「関係性」からみたアイデンティティ研究の動向と展望：発達早期における「個」と「関係性」の起源に着目して　広島大学心理学研究, **6**, 223-242.

杉村和美 (1999). 現代女性の青年期から中年期までのアイデンティティ発達　岡本祐子 (編著) 女性の生涯発達とアイデンティティ　北大路書房　pp.55-86.

杉村和美（2001）．関係性の観点から見た女子青年のアイデンティティ探求：2年間の変化とその要因　発達心理学研究，**12**，87-98.
高井範子（1999）．対人関係性の視点による生き方態度の発達的研究　教育心理学研究，**47**，317-327.
高村和代（2006）．宗田・岡本論文「アイデンティティの発達をとらえる際の「個」と「関係性」の概念の検討」へのコメント　青年心理学研究，**18**，93-96.